**読書ノート　その28**

2019年3月27日

1. **山折哲雄「義理と人情　長谷川伸と日本人のこころ」（新潮選書、2011年10月）**

* 長谷川伸（1884-1963年）は「一本刀土俵入り」「瞼の母」「沓掛時次郎」等の劇作家、小説家。
* 本書は宗教学者・山折が長谷川伸の作品を「義理と人情」を切り口に評論したもの。山折は長谷川伸を「日本人の精神の基層に横たわる倫理観に光をあて、そこにひそむ義理人情の感覚をもっとも的確につかみ、みごとに表現した作家」と評価している。
* 「夜もすがら検校」－盲目の琵琶法師が雪の山中で行き倒れているところを若者に助けられ家に連れていかれた。囲炉裏にくべるものがないので彼は仏壇をこわして琵琶法師の身体を暖めた。数年後、法師が住む京の家に彼が訪ねてきた。彼は失った田畑を買い戻すため他国へ働きに出ていたが目的はまだとげていない。法師は彼を歓待したが、最後に高価な琵琶をこわして囲炉裏にくべた。
* 「沓掛時次郎」－時次郎は熊谷宿のある親分の家にわらじを脱いで世話になっているところ、その子分たちは対立している中ノ川一家の最後の生き残り三蔵の家に殴り込みをかける。時次郎は一宿一飯の恩義で殴り込みに加勢し、三蔵を斬り殺す。三蔵は時次郎に「妻子をたのむ」と言ってこと切れた。時次郎は未亡人となったおキヌと子をつれて旅に出て、彼らのために渡世人の足を洗うことを決心する。ところがまたもやヤクザの助っ人をたのまれ、時次郎は苦しいフトコロ具合のため報酬にひかれ助っ人を引き受けてしまう。病のおキヌは「いくな」と引き止めるが、時次郎は助っ人にいってしまう。おキヌは見棄てられたと思い嘆き悲しむ。戻ってきた時次郎はこと切れていたおキヌを発見する。
* これが、義理の論理。義理とは、人の期待を裏切らないこと。寒いときに暖かくしてほしいという期待、仏壇を燃やして暖めたのだからそれに相当することを返してほしいという期待、一宿一飯を提供したのだから加勢してほしいという期待。その期待に応えるのが義理。これが日本人の道徳になっている。
* 義理人情の由来は、日本人は神を信じずに人間を信じたことから来ている。つまり、人間の想いや怨みを信じたのであり、それが祖先信仰や死霊のたたりを恐れることにつながった。これが日本の原始宗教であり、日常のモラルとしては「人の期待を裏切ってはならぬ」という義理人情の思想になった。
* 柳田國男「国史と民俗学」を引用しつつ、親子の関係が義理人情の根本にあるのではないか。日本では「親」は生みの親だけでなくさまざまな親を意味している。「子」も同様。義理の親、義理の子ども、養子、猶子（豊臣秀吉は近衛家の猶子）、養親、名付け親、ヤクザの親分・子分など。このような親と子の関係において、親の責務は子の末々までみとどけるということ、子を人間として存続させることであり、すなわち生存権の支持の責務である。これが義理人情の根本にあるのではないか。

1. **小池利正「あまえと義理－日本人の心の構造」（鳥影社、2006年12月）**

* 長野市在住の竹細工師、一閑張り作家（和紙で箱などを作り漆で塗り固めたもの）。自費出版か？
* 日本人の心の構造は、他者の対象として自分を認識しているということ。つまり、私とあなたの関係において、あなたの立場から自分を見ている。だから、自分の子どもに対して「パパの言うことを聞きなさい」と言う。（「他者依存の自己規定」については2016年11月に報告）
* 他者の対象として自分を認識しているから、お店のシャッターの貼紙に「本日はお休みさせていただきます」と書いてある。なぜ「本日はお休みします」ではないのか？　これは、相手の意向をあおぎ、その承諾のもと「本日は休む」という形を作るから。つまり、店主は顧客を経由して自分の店を認識しているということ。
* 同じことは、スポーツの応援で「負けるな！」と言うことにも表れている。韓国人は「勝て！」と言う。なぜ日本人は「負けるな！」と言うのか？　「負ける」の原辞（原形）は「負かす」、この「負かす」の意味は自分の行為によって対戦相手の負けをつくり出すこと。ここには相手の存在がある。だから「負ける」にも対戦相手の存在が想定されている。「誰々に負ける」。一方、「勝つ」の意味は自分が勝つのであって、勝ったときには勝者としての自分しかいない。負けた他者は背景の中に埋没する。つまり、「負けるな！」は対戦相手（韓国・中国等）の存在を認識したうえでその対戦相手に日本は「負けるな」と応援している。ここには必ず相手の存在がある。「勝て！」にはそれがない。
* 日本では子どもが誰かからプレゼントをもらうと親が子どもと一緒に「ありがとう」と礼を言う。個人主義の考え方が浸透している欧州では、親は礼を言わない。プレゼントをもらったのは子どもなのだから。日本では、親と子どもは、たがいに相手方を経由して自分を認識しているので個人が確立していない。だから、親も子どもと一緒になって「ありがとう」と礼を言ってしまう。
* その他色々と事例が紹介されているが省略。
* 義理とは何か？　一つは、「ソト」が「ウチ」に入った義理であり、もう一つは、「ウチ」が「ソト」へ出た義理である。（分かりにくい・・・）　ちなみに、文字としての意味は「正しいすじ道」のこと。
* 井原西鶴（1642-93年）の「武家義理物語」を例に「ソト」が「ウチ」に入った義理を説明します。ストーリー要旨 ： 二人の少年武士が刀の鞘がふれたと切り合いになり一方の少年が斬り殺されてしまった。殺した少年の父は、その少年に手紙を持たせて殺された少年の父のもとに行かせた。その手紙には、「貴殿の息子を殺したこの少年をすきなようにして下さい」と書いてあった。これを読んだ殺された少年の父は、「これ幸いとこの少年を殺すわけにはいかない」とその少年を我が子として育てることとし養子にした。養子となった少年は名前を殺された少年の名前に変え、その家の子どもとして生きていった。
* 養子となった少年は養親の意向に従って「私」を無くして生きたということ。つまり、即他・非私。他人の意向に即して私を無くすこと。これが義理である。「ソト」が「ウチ」に入るとこの種の義理が生じる。
* 次に、「ウチ」が「ソト」へ出た義理。作者不明の物語 ： 讃岐の国に美男の武士と美女がいて、二人は結婚したが、ほどなく殿様が死んだので、その武士は殉死すると伝えた。するとその妻はあわてた様子もなく「潔く最後をとげてください。私は縁があったら再婚しますからご心配なく」と言った。夫は妻の言葉をいぶかしく思ったが、見事に最後をとげた。その直後、妻も自害した。これを聞いた世間の人は「夫の殉死の決意がゆるがないためつれない言葉を言ったのだろう」と妻の心づかいをほめたたえた。
* 相思相愛の二人は互いに「ウチ」の世界にいます。「ウチ」の世界は人情の世界。そこに殉死という究極の義理が入り込んできたが、そのまま殉死ということになると人情は断ち切れずに未練が残る。それではいけないと、妻は「ウチ」の世界から一歩「ソト」の世界へと出て行き、人情を断ち切ってつれない言葉を言った。これにより夫も人情を断ち切ることができ、見事に義理をとげることができた。つまり、「ウチ」が「ソト」へ出た義理。
* この義理の二分類は分かりにくいが、要は、義理とは即他・非私、他人の意向を自分の意向として行動すること。自分を無くして他人の意向に従うこと。
* ここで思い出すのは「滅私奉公」。我思うに、義理を人間と国家の関係に適用したのが「滅私奉公」なのであろう。自分を無くして国家の政策に協力する。義理は、前提として、他者の対象として自分を認識する日本人の心の構造があってはじめて成り立つものなのであろう。個人主義の欧米人に理解できないのは当然と言える。日本人は親しい友人には贈り物をしないのに、親しくない上司には高価な贈り物をする。欧米人は逆。
* コンプライアンスへの示唆としては、他人の意向に即して私を無くすという義理の思想は、上司の不正な指示にも自分の意見を抑えて従ってしまうのではないか。滅私奉公的な社風やお歳暮・お中元が習慣化している社風は要注意なのであろう。

以上